

## ■ ■ ■ 導入

・なぜ歴史的観点が必要なのか

翻訳における二言語の関係——成熟・形成の度合など——が一様ではないから

## 資料 0

柴田元幸「英語として自然な表現であれば、ほとんどの場合は日本語として自然な表現の対応物がある」と考えながら翻訳に取り組むべきだ  
(『翻訳夜話』文春新書、2000年、102頁)

現代英語と現代日本語のように、それぞれに成熟した(世界をほぼ完全に記述しうる?)言語間でのみ翻訳がなされてきたわけではない  
歴史的に、対等ではない関係、すなわち未成熟・形成途上の言語で十分に形成された言語を翻訳しなくてはならない事例は少なくなかった

## 資料 1

ルクレティウス『物の本質について』(紀元前 1c) 「ギリシア人のわかりにくい発見を、ラテン語の詩に綴って説明するのは……」

※エピクロス(現存しない『自然について』)をラテン語に移し替えたもの、少くとも題名は完全に翻訳

成熟した言語から未成熟・形成途上の言語への翻訳 …… I 型 → 機械翻訳・自動翻訳では対応不可能(?)

成熟した言語間での翻訳 …… II 型

※これらふたつの「翻訳」はひとくくりにはできるか? …… 翻訳とローカリゼーション?

(今後の課題 ・書き言葉と話し言葉の関係も一様ではないから

→ 語られることを前提とした書き言葉=詩、劇、(宗教的)説教など/黙読されることを前提とした書き言葉

・文章ジャンルの違い → 現代のように「翻訳」「翻案」「創作」等々と分かれていなかった?)

・中世・ルネサンス・近代初期が多言語的空間であった点に注意

・成熟した言語から未成熟・形成途上の言語への翻訳(I型)は、ヨーロッパでは「知の移転」(translatio studii)の主要な部分をなす営みと捉えられた  
問題となるのはまず、知と特定言語の結びつきの絶対性……世俗的ヨーロッパではギリシア語、次いでラテン語と知の結びつき

→ 知の移転を企図する者にとって、知と特定言語の結びつきは否定さるべきものである(「知の移転」の政治的・イデオロギー的側面)

→ 知と特定言語が分かちがたく結びついているとすれば、翻訳は可能か? また「忠実」と称する翻訳が実際に行なっていることは何か?

→ (翻訳を通した)知の移転は、諸言語から自由な知なるものの存在を前提にしている。本当にそのようなものはあるのか?

→ さらに、「動的等価理論」に基づくローカリゼーションでは、知と言語の関係はどのようにとらえられているのか?

次に問うべきは、形成途上の言語において「形式」重視の翻訳(「意味」重視のそれに対立するものとして)はそもそも可能か? ということ

→ 中世から近代にかけてのヨーロッパで実際に起こったのは、すでに出来上がった容器(としての言語)に内容としての知を移し入れるとい  
うことではなく、移転と並行して容器そのものを作るということだった …… I 型と II 型における「知の移転」のあり方の差異?

→ 「形式」が存在しないか未熟な場合、「形式/意味」の二元論(または二者択一)は成り立たないのでは?

## ■ 古代ギリシア(紀元前 8 世紀～前 4 世紀) 「ギリシア人は翻訳しなかった?」 「翻訳」概念の問題

異文化・異言語 (barbaros, -roi) との接触・交流はあったが、それらを価値の劣るものと見なしていた (翻訳の契機・動機の不在)

hellênizein ギリシア語を話す/学ぶ、ギリシア語で説明する(「七十人聖書」以降)

hermêneuein 解釈する (→ interpret, hermeneutics)

metaphrazein いい換える

metapherein 運ぶ、移し替える、変える、言葉を転用する=譬喩としていう (metaphor) ※ meta- 越える pherein 移す

アリストテレス(前 4 世紀)の定義

「隠喩は類似/類比(analogon)に基づいてある事物を別の事物の名で呼ぶ」こと

→ 〈名と物の分離〉と翻訳あるいは知の移転(translatio studii)の関係

……隠喩表現が認識の根幹をなす作用であるとするれば、名と物の分離、すなわち言葉と知の分離は不可欠?

ギリシア都市国家の衰退 → → → ギリシア文化(文書)はエジプトなど東方に移る(ヘレニズム、アレクサンドリア、コンスタンティノポリス)

## ■ 古代ローマ

知の移転の起源 = ギリシャ語の模倣・「翻訳」を通じてラテン語を形成し洗練させる

imitārī (imitor) 模倣する

interpretārī (interpretor) 説明する

(con)vertere ((con)vertō) 変える

exprimere (exprimō) 外に出す = 表現する

**trādūcere (trādūcō)** 運ぶ、もち来らす (→近代以降のロマンス諸語において「翻訳」 イタリア語 tradurre フランス語 traduire)

資料 2

カエサル『ガリア戦記』1巻35節(紀元前58年)

[...]; first, that he do not any more bring over any body of men across the Rhine into Gaul; [...]

**trānsferre (trānsferō)** 移す

→ **trānslātiō** (過去分詞より) 隠喩、転義……ギリシャ語の *metaphora* に相当

キケローは模倣を通じてのギリシャ文化の転移を創造的営みと見なす。とりわけ隠喩と造語を有効な手段とした(『弁論家について』、『弁論家』)

資料 3a

キケロー『弁論家について』(前55年)

……参考ニーチェ「古代修辞学講義」)

希臘語 εὐδαιμονία (eu-daimon-ia) を *beata vita / beatitas / beatitudo* など「翻訳」

「どちらの語も生硬だが、使用することで柔らかくしていかなくてはならない」(『神々の本性について *De natura deorum*』前45年、1.95)

もつとも彼は、盛期ローマ文藝の代表的散文家であり、成熟期を迎えつつあったラテン語(つまり古典ギリシャ語との関係がすでに I 型を脱しつつあった)のさらなる洗練を目指していたと見るべき → ここで初めて翻訳方法が(選択肢として)問われる

「プラトンやアリストテレスをそのままラテン語に変換しても (sic verterem) ローマ人への十分な貢献をしたことにはならない」…… I 型

「自分はそのような形の翻訳はしていないが、今後は必要な箇所は移し替え (transferam) ようと思う」…… II 型

(『善と悪の究極について *De finibus bonorum et malorum*』前45年、序文)

資料 3b

キケロー『弁論家の最高種について』(紀元前46年)

保存さるべき「言葉の種別と力」、「言葉の重さ」とは何を意味するのか?

ただし翻訳における忠実性は問題となっていない。それが問われるのは聖典が翻訳されるようになって以降? (cf. ヒエロニムスとの違い)

## ■ ユダヤ教聖書(紀元前13世紀?~5世紀?)

ヘブライ語に代わりパレスチナ地方の標準的言語となったアラム語に訳されるなどしたのち、紀元前3世紀頃より、オリエントの共通語のひとつであるギリシャ語(古典ギリシャ語と同一ではない)に翻訳される(最も有名なのが「七十人聖書」)

・字句通りの翻訳の成立条件

ヘブライ語聖書は(文学的テキストというよりむしろ)法律文書と見なされていた可能性がある → 字句通りの翻訳

パレスチナのユダヤ人の多くはヘブライ語(アラム語)とギリシャ語の二言語併用、したがってギリシャ語訳は、原典と共に読まれることを前提として、とりあえず字句通りに訳され、必要に応じ修正されるものと見なされていた可能性がある → 現代における哲学書翻訳の例

他方、エジプト(アレクサンドリア)のユダヤ人はヘブライ語が読めず、翻訳であるところの「七十人聖書」に高い価値を置かざるをえなかった

## ■ キリスト教聖書

紀元1-2世紀にローマ帝国の公用語のひとつであるギリシャ語でキリスト教聖書が書かれる → 西方への布教のために、ラテン語に翻訳  
西ローマ崩壊と前後して、聖ヒエロニムス(4-5c)が翻訳・校訂を施し、ひとまず集大成を行なう(ウルガータ)

ヒエロニムスは翻訳対象となるテキストの性質によって翻訳法は異なりうると考えていたようにも見える

## 資料 4

ヒエロニムス「パマキウスへ、翻訳の最高種について」

聖典以外はキケローやホラティウスの称揚したやり方 cf. 資料 1 と 3

聖書は「語順さえ神秘であるがゆえに 原語を尊重するやり方、また 異端認定を避けるべく、恣意性のより少ないと考えられる方法

だが、ウルガータの序文では例えば次のように書かれている。

## 資料 4b

ヒエロニムス「ウルガータ聖書 ヨブ記序文」(「翻訳と注解(2)」石川立、加藤哲平『基督教研究』2010年、72巻、1号、52-53頁)

この翻訳(ウルガータ訳)は、古代の人々のいかなる訳にも依拠していない。むしろ、ヘブライ語、アラビア語、そして時にはシリア語から、あるときは言葉が、あるときは意味が、またあるときはその両者が同時に響いてくるはずである。この書物全体は、ヘブライ人のもとでさえも、婉曲的であり、掴み難く、また修辞学者たちがギリシア語で「(言葉に)綾あるもの<sup>8</sup>」と呼んでいるものと見なされている。つまりあることを語りながら、別のことを表現しているのである。

註8 ἐσχηματισμένος。副詞形のἐσχηματισμένως(eschimatismenos)は、①「比喩的に」(アレクサンドリアのオリュンピオドロス:6世紀, fragmenta ex commentariis in Job 8:21)、②「見せかけのやり方で、不正に」[…]、③「密かに」(アタナシオス・スコラスティコス:6世紀, collectio novellarum constitutionum 1.1) という意味だとされている(Lampe, G. W. H., A Patristic Greek Lexicon (Oxford: Clarendon Press, 1961): 552)。

ウルガータはヒエロニムス以後も改訂され続ける

8-9世紀にかけてカロリング朝フランク王国に招かれたイングランドのアルクインによる校訂など

※ローマ化が相対的に進まなかった北方諸国と南方のロマンス語圏とは、ラテン語や聖書のその後の地位、影響の仕方は異なった

北方では、土着の俗語とラテン語が影響を与え合う度合いが低く、それぞれが(相対的に)自立を保つ傾向があった

→ ラテン語は比較的古い形態のまま存続、俗語は文章語としての整備の試みが早い時期に始まる(聖書翻訳、詩文)

→ カロリング朝ルネサンスでは、伝統的ローマ文化に通じた聖職者としてアルクインらがイングランドから招聘された

※イングランドはゲルマン民族大移動に端を発する混乱・変化の影響が相対的に小さく、古代語・文献が比較的よく保存されていた

→フランク王国にキケロー、ウェルギリウス、アウグスティヌス等をもたらし、中世ラテン語の改良を試みた(影響は永続的ではない)

つまりラテン語訳聖書の校訂に必要なラテン語能力は、古代ローマ文学から摂取されたといえる

### ■ルネサンス(キリスト教神学にとらわれぬ自由な思考のために古代が模範として注目される)

中世においても古典は散発的に見出されていたが、本格的な再発見は、東ローマの滅亡に伴って、コンスタンティノポリスなどからギリシャ語話者や文献がイタリアに移ってきてから(同時代までにビザンツ帝国で培われてきた古典文献学を採り入れた)

ルネサンス(古典復興)とは、社会的にはローマ教会の権威・権力を相対化し限定すること(translatio studiiの政治的側面)、

そして言語的、翻訳的には、

・忘れられていた古典古代文化・言語を再発見し、それを範として中世ラテン語を改良すること、そして同時に、

・古典ギリシャ語・ラテン語にならい、各俗語を共通語として、また標準的書き言葉として洗練させること

翻訳、文法整備、文献学の萌芽

各俗語の最初の文法書=仏15世紀、伊15世紀中葉、独16世紀前半、英16世紀末(グラマティカとは「法則」、「書かれたもの」)

「方言」への関心が高まる(ギリシャの再発見との関連? 言葉としてはギリシャ語起源「アッティカ方言」)

ラテン語に代えて俗語を用いようという機運は、ローマ教会から自立した国家の建設と関連している。「国家」という幻想を支えるのが共

通語(フランスの事例)や共通語で書かれた書物=聖書(ドイツの事例)

原典への忠実性という問いが文献学的厳密さの追求として現われたといえるが、それは聖書翻訳における、信仰の真偽を測るとされた忠実性の問いと同じものか? → ヒエロニムスやルター、欽定訳聖書の事例

ルネサンス期、エラスムスはキリストの教えを真に知るためには原典を読む必要があると考え、ギリシャ語聖書の校訂を試みる

→ ルターやティンダルの翻訳は、新約についてはエラスムス校訂版に依拠した(現在ではこの版は信頼の置けないものとされている)

## 第 2-5 回 フランス語の形成と翻訳

## ■翻訳論(翻訳について書かれたテキスト)の読み方、読む意義

- ・時代時代のトポス(決まった儀礼的物い、ステロタイプ)
- ・「意味重視」か「形式重視」かというような二者択一の問いの批判
  - ※翻訳のそもそもの目的は「意味」の把握にある、すなわち「意味」を移し替えるのは翻訳の最低限の目標だから
  - ※ルター(神の教えの書き表し方は信仰のあり方によって定まる)
- ・分類はむしろ、対象テキストの種類に応じて(ただし以下のような分類は現代に限られる)
  - ・「意味」を移し替えれば十分なもの(産業翻訳など)
  - ・「意味」を移し替えるだけでは不十分なもの(文学、宗教、哲学など) → 翻訳論が主としてかわる領域
    - ※諺、また法律や条約は?
- ・「英語＝ラテン語」説に対する疑問
- ・翻訳者による自身の訳業の説明……I 型 → 重要だが、実践との食い違いに注意
- ・第三者による研究・評論……II 型

## ■フランスの翻訳論

I 型についていえば、フランスには重要なものが少ない(ドイツとの比較で)

- ・フランスには重要な翻訳作品が存在しない → 少数だが存在はする
- ・(実情がどうあれ)フランスでは翻訳が軽んじられてきた
  - ← ドイツ語などと比べ、形成が早く進んでいたフランス語の国際語としての地位(中世後半期においてラテン語に次ぐ地位、17-20c 前半までのヨーロッパにおける筆頭言語)

## 資料 5

ゴットシェット(1700-1766 フランス古典主義から強い影響を受けていた啓蒙主義の中心的文学者、ドイツ語改革にも功績があった)

「古代ギリシャ最良の作家たちをフランス人が己の言語に訳したとたん……」

ペロー、ダブランクール

ヴォージュラ、ダシエ夫妻

※啓蒙思想における言語や文化の可塑性、改良可能性(perfectibility)

## 資料 6

A・W・シュレーゲル(1767-1845 ベルリンで行なった講義(1801-04))

「詩において全く因襲的な語法を採用し……」

## 資料 7

W・フォン・フンボルト(『アガメムノーン』翻訳への序論)(1816)

「フランス語ではギリシア人あるいはローマ人の作品、ことに幾人かの詩人の作品は……」

つまり「フランス語は翻訳に頼る必要のない言語である」という神話ゆえに、翻訳史が忘却・隠蔽されてきた

→ II 型の翻訳論がそれを指摘し始めた(20c～、ヴァレリー・ラルボー、アンリ・メショニック、アントワーズ・ベルマン他)

※ドイツは逆に、フランスとの比較における遅れを意識したがゆえに、精力的に翻訳を行ないつつ、それを自尊心と矛盾しない形で正当化しようとした(極端にいうなら、言語・文化形成の遅れを翻訳によって取り戻し、さらには追い抜くということ)。

→ 翻訳についての思考の深まり(18c～、ゲーテ、シュライアマハー、フンボルト、ベンヤミン他)

古典期・ロマン期ドイツでは「形式重視」の翻訳が多数行われたとされるがそれは、ドイツ語の形成が遅れていたため……II 型の翻訳例、方法的な選択ではなく、そうせざるをえなかった(?) → ギリシャとのつながりの主張の根拠は??

## 資料 8

W・フォン・フンボルト(『アガメムノーン』翻訳への序論)

「近代語の中にあつてただ一つドイツの言葉だけが……」

■ 古典ラテン語から(俗ラテン語を経て)フランス語へ

- ・書き言葉である「古典ラテン語」はキケローやウェルギリウスの時代に洗練の極みに達したのち、帝国の崩壊とともに、形を変えてゆきながらも、中世を通じ、唯一の書き言葉として、また高度な思考、抽象的な概念を唯一可能とする言語として生き延びる。また公用語として、教会の標準語として用いられる(4世紀までカトリック典礼の言語はギリシャ語、それ以降 20世紀までラテン語)

17世紀後半まで、ヨーロッパで出版される書物の大半はラテン語、19世紀初頭まで俗語からラテン語(共通語)への翻訳も行なわれていた。話し言葉「俗ラテン語」は元来の土着語やゲルマン諸族の言語と混ざりながら、各地で固有に展開する(ロマンス諸語や英語、ドイツ語の祖)

文章体ラテン語	sermo urbanus		scribere <u>fratri meo</u>
俗ラテン語	sermo rusticus / vulgaris	……前置詞依存傾向(分析的)「私の兄に手紙を書く」	scribere <u>ad meum fratrem</u>

いい換えれば、中世ラテン語からフランス語への翻訳では主として語彙が問題となるのに対し、古典ラテン語からの翻訳においては、語彙に加えて、文構造の違いが問題となった。

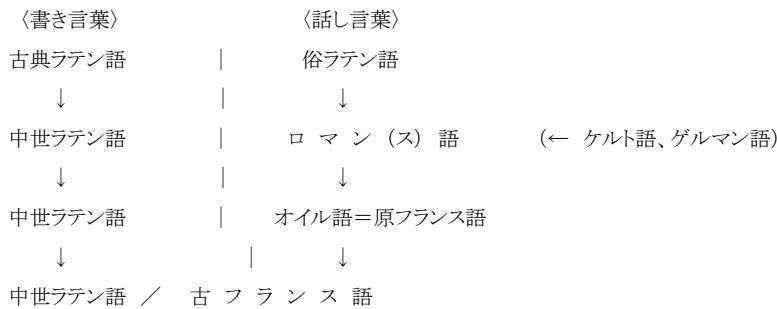
■ フランス語の形成……translatio studii の運動のうちに位置づけられる

- ・カトリック国であり、ロマンス語圏であることから、聖書との関係や異教古典とのかかわりにおいて、ドイツやイングランドと異なる  
=フランス語の形成に聖書翻訳はほとんどかかわっていない
- ・現在のフランスの北半分における言語形成(フランク族が 5c 頃に定着した地域、パリを都とする(508年)) ※南半分は西ゴート族の定着した地域に一致(オック語)

基層=ケルト語(ドイツ南部発祥)、ラテン語(書き言葉として行政・法律・宗教・学問に用いられる)…… Paris(ケルト系パリシー族の町)をローマ人は *Lvtecia* と名づけた

直接の祖=俗ラテン語(Latin vulgaire / Vulgar Latin / romana lingua rustica) → ガロ=ロマンス諸語(Langues gallo-romanes / Gallo-Romance languages)のうちのオイル語 → 原フランス語 → 古フランス語(9-14c) → 中世フランス語(14-17c) → 古典期フランス語(17-18c)

- ・中世末期から次第に土地の言葉を書き言葉として用いることが試みられる



496年 クローヴィスがカトリックに改宗、ラテン語を典礼語・行政語として採用(俗ラテン語の簡略化された構文とゲルマン系語彙)

※以降フランスでは王権と教権が互いに利用し合う関係が出来る(14cの「アヴィニョン捕囚」や「教会大分裂」を経て)

- ・フランク王国では当初、俗ラテン語とゲルマン語の二言語併用 → 原フランス語は8c頃よりラテン語でもゲルマン語でもない独自の言語として併存しながら自立を果す

ラテン語由来		ゲルマン語由来	
王	roi (regem)		
公爵	duc (ducem)	侯爵	marquis (marka)
伯爵	conte (comitem)	男爵	baron (baro)

中世詩人はしばしば同義のラテン語系形容詞とゲルマン語系形容詞を並べて用いた

※ただし、ゲルマン語系要素はルネサンス期までに大幅に減少し、ラテン語やイタリア語由来の要素に取って代わられる

## カロリング朝ルネサンス(8-9c)

- ・キケロー、ウェルギリウス、アウグスティヌス(=古典ラテン語)の再発見
- ・古典的ラテン語を参考に、文章体ラテン語を整備する

ラテン語(俗ラテン語の影響も受けた中世教会ラテン語)による説教と、市井の人々の日常の言葉との乖離

→ 布教に困難を避けるため、土地の言葉への翻訳が推奨される

## 資料 9

トゥール公会議 第 17 宗規(813 年)

「語られたことを誰もがもっと容易に理解しうるように、各人が説教をロマンス語ないしドイツ語に移し替えるよう……」

842 年「strasbourger Eide / Serments de Strasbourg」……ラテン語とは異なる言語(romana lingua ロマンズ語/原フランス語)として最古の文書

- ・中世ラテン語の地の文に挟まれて、二人の王の(ほぼ同一内容の)誓いが teudisca lingua と romana lingua で記されている
- ・行政の言葉

## 資料 10

「神への愛のために、またキリスト教徒とわれら全ての救いのために、今日より、神が私に知と力を与えたまうかぎり……」

古高ドイツ語(ライン・フランコンア方言 Rhenish-Franconian dialect)/ロマンス語

880-882 (?)「聖女ウーラリーの続誦」(Séquence de sainte Eulalie)……原フランス語最古の文学的テキスト

- ・ラテン語で伝統的に書かれてきた聖者伝の移入
- ・ラテン語の歌から採られた内容を修道院の言葉(=民衆の言葉に近い)に書き直したもの……これは翻訳か?
- ・定冠詞と条件法動詞の出現

Buona pulcella fut eulalia. Bel auret corps bellezour anima.

Voldrent la veintre li deo inimi. Voldrent li faire diaule seruir.

11c 中 「聖アレクシ伝」(Vie de Saint Alexis)……『ロランの歌』など世俗叙事詩の原型

- ・フランスでは聖者伝と世俗文学がほぼ同時期に関連しあいながら始まる
- 王権と教権の親密な関係の表れ(中世後半から近代以降は王権が優勢となる)

文型変化 目的語・補語+述語動詞 → 述語動詞+目的語・補語(ただし目的語が代名詞の場合は前置)つまり動詞文末 → 文の中ほど  
名詞・形容詞等の屈折語尾 → 前置詞の使用(ラテン語=総合的、近代語=分析的)……14c まで辛うじて 2 格が残る、翻訳に際してシNTAX  
スの問題が生ずる

名詞修飾語句の後置/冠詞の発明/新しい音声の発明など

## ■フランスにおける翻訳

- ・13c 頃より、支配層から注文によって古典作家(les auctoriates)の翻訳が始められる

※聖職者は異教古典の翻訳の必要をそれほど感じていなかった

とりわけシャルル 5 世(在位 1364-80、イングランドとの百年戦争→国民意識の形成、教会大分裂)はルーヴル宮に図書室を造り、聖書を始めとする書物(当時は宝飾品と同じくらい貴重なもの)を集めたが、そのコレクションに加えるためもあり、古典の翻訳を命じた

→ 異教的古典の翻訳=ローマ教会との関係の変容

- ・中世から近代初期にかけての翻訳作業について、当事者たちは一般に、それが創作より劣るものとは考えていなかった(王の命によるものであるとすれば、劣っているなどと書くことはいずれにせよ許されなかったが)

- ・ラテン語の字句通りの翻訳(少数派)

ジャン・ド・ヴィネによるウェゲティウス『軍事論』(De re militari, 4c)の翻訳(14c) → 上手く訳せないとすれば翻訳者の技術が低いせい

資料 11 「文字の真実のみを追いかけて……」

・大多数の者はラテン語とフランス語の差ゆえに、文字通りの翻訳は不可能と考えた

アンティオキアのジャンによるキケローの修辞学(*De inventione*, BC1c)ならびに当時キケロー作とされていた *Rhetorica ad Herennium* の翻訳(13c 後半)……シリア在住、王の命によってなされた翻訳ではないため、翻訳に添えられた文章は、当時の決まりきった表現から成る「訳者あとがき」と一線を劃すことがおそらく可能

資料 12 「ラテン語での話し方は全体的にフランス語の話し方と同一ではなく……」

→ ラテン語とフランス語の差異を、すべての言語間の差異へと一般化する=フランス語を劣ったものとしてラテン語の下に置くのではなく、たんにラテン語と異なる言語、そういうものとしてラテン語と同列に論じうる言語とみなす……革命的なこと

ジャン・ド・マンによるボエティウス『哲学の慰め』(*Consolatio philosophiae*, 6c)の翻訳(13c)……ド・マンは『薔薇物語』続篇(1270、クレマン・マロが 15c に仏語訳する)の作者、またウェグティウス『軍事論』やアペラール=エロイズの書簡のフランス語訳者として知られる。ボエティウスはアリステレス『論理学』等をラテン語に訳している

資料 13 「[中世]ラテン語を逐語的にフランス語に訳したところで……」

=逐語訳は、世俗の人々(laïcs)には理解不能だし、(中世ラテン語に通じている)聖職者(clerics)には必要がない

#### ■ *translatio studii* の問題……知(物)と特定言語(名)の結びつきは絶対的なものか

クレティアン・ド・トロワ(12c フランスの吟遊詩人)……アーサー王伝説(まずラテン語でまとめられた)をフランス語で歌う(『クリージェス』ほか)

資料 14

→ 文化をわがものとする(*appropriation culturelle*)という主題……ただし、王を讃えるといった目的にも奉仕するトボス

#### ■ ニコル・オレーム(Nicole Oresme 1320?-1382)

フランスの聖職者、哲学者・科学者

シャルル 5 世の命によりアリステレス『ニコマコス倫理学』(=ロマンス語における初の完訳、1370)、『政治学』ほか古典の翻訳を行なう  
……13c の中世ラテン語訳(*Vetus translatio*)からの重訳

※アリステレスの著作はギリシャ語からアラビア語に訳され、イスラム文化圏で独自に継承・展開が行なわれていた

オレーム訳『ニコマコス倫理学』には「序文」(*Proheme*)と「弁明」(*Excusacion et commendacion de ceste œuvre*)が添えられた。前者では『倫理学』(とその翻訳)の意義・効用について、後者ではギリシャ語、ラテン語、フランス語ならびに翻訳についての考察が述べられている

→ オレームは、ギリシャ語→ラテン語の歴史的関係、ギリシャ語より遅れた言語であるラテン語が「知の移転」を通じて改良(洗練)された事例を、ラテン語→フランス語の関係に投影した=言語から離れて存立しうる知というものが前提となっている

※ただし、古典的ラテン語はギリシャ語と同様の「簡潔さ」(ないし総合性)をもっているため、分析的な近代語への翻訳におけように語(前置詞その他)や説明を付け加える必要はあまりなかった。

※ここで言語間関係における I 型と II 型を区別すべきか? (希-羅の関係と羅-仏の関係は本当に相似なのか?)

資料 15

オレーム「弁明」 「ローマにギリシャ語で学問が移入されたとき、その地における日常語、母語はラテン語だった」

※オレームは「母語」という表現をラテン語から俗語に最初に訳した

ただし、古代ローマ市民にとって生得の言葉は「母語」というよりむしろ「父語」(*patrius sermo*)だった=生得の言語は当時は父的なものと結びつけられていた

おおよそ同じ時代、イングランドの詩人チョーサーもまた、土地の言葉で学問を行なうことに価値を与えていた(フランス語=支配層の言語)

## 資料 16

チョーサー「天体観測器について」

翻訳の営みはオレームにおいて初めて、特定の作品を離れて、知や文化の移転 (appropriation わがものとする) を一般的に問うものとなる

→ 知とラテン語の結びつきは絶対的なものか

・絶対的であれば「移転」は不可能。翻訳者はその絶対性に挑戦し、観念的にラテン語と知の紐帯を相対化することで「移転」を行なった

→ 実際には、その「移転」は「知」の変容を伴っていた

オレームはラテン語 *communicatio* から *communication* を造ったが (1370)、元の意味のうち、キリスト教の影響下にあった *communio* 「社会的関係、人間相互の関係」という意味が失われ、*communication* = *translation* 「内容の移転」を意味するようになる

→ しかしオレームはその点は無視して、普遍 = 不変の「内容」の移転の可能性を主張した

※意味内容と特定言語の紐帯が否定されれば、翻訳過程で何も失われず、したがって翻訳も——また翻訳の翻訳も——原典と同等の価値を有するようになる (当時フランスにおいてさえ、翻訳は一段劣ったものとは見なされていなかった)

→ なぜ知の「内容」は変化をこうむるのか?

オレームは単に王の命に従っただけではなく、その命に理論的な根拠 (= 「知の移転」) を与え称賛した。

## 資料 17

・ただし、名目上はラテン語と同等になったとしても、フランス語には語彙も哲学的論述に必要な各種形式もそなわっていなかった

→ オレームの訳業は、(現代の視点からすると) 翻訳と註釈の中間にあるといえるが、これは散文をつくり出すという要請にかかわっていた

※哲学の翻訳と註釈の問題

## 資料 18a

[ラテン語訳] [トマス・アクィナスによる註釈] [オレーム訳]

et multi      et multi, id est populares      la multitude, c'est-à-savoir les populaires

・対応する語句がない場合、中世の翻訳者は、ラテン語を敷き写して新語を造るやり方を好んだ (というかそうする以外になかった)

オレームもラテン語訳が転写したものを引き継ぐ形でフランス語に採り入れた ex. *διάλογος* → *dialogus* → *dialogue*

## 資料 19

・新語・造語は、それ自体の意義を説明するために別の語句を必要とする

→ 文中における類義語の並置 → 文体あるいは統辞的構造のひとつとして定着

## 資料 18b・c

ピエール・ベルシュイール (14c フランスの司祭、哲学者) ……自らラテン語で哲学書を著す、また BC1c ローマの歴史家ティトゥス・イウィウスの『ローマ建国史』を訳す (14c 中頃)

## 資料 20

フランスで初めて用語説明 (glossary) を翻訳に添える …… 70 項目

→ ベルシュイールの意図はどうあれ、訳語の定着・安定化に寄与するものだった (40 ほどの写本の数が物語っている)

→ ここでも、主眼は意味の伝達であって、形式の創造という側面は意識されていないようである



フランス語の哲学的——論証を可能にする(discursive)——散文の誕生

→ 論旨を追うことが困難な文章に混じって、きわめて「現代的」な文章がオレームの翻訳中に史上初めて誕生した

#### 資料 21

オレーム

→ 結果としては、「内容」の(変形を伴う)移転と同時に、「形式」(特に語彙と論証形式)が移された

=フランス語の一種のラテン語化……つまり、オレームは「内容」の移転として *translatio studii* を考えていたのだが、実際に彼が行なおうとしたことは、その構想を越えるもの(=traduction)だった

#### ■ルネサンス

・主として *auctoritates* を翻訳対象にした中世とは異なり、あらゆる時代・言語の文書が対象となった

→ 中世には、国籍や「母語」如何ではなく、文書のジャンルによって用いられる言語が決まっていた (学問:ラテン語、恋愛の歌:オック語など)

→ 「母語」やそれと対になる「外語」の出現により状況が変わり、「自分たちの言語」であらゆるものを書き表すことが目指された

→ ルネサンスでは、特定のジャンルに限定されない散文そのものの形成が行なわれることになる

翻訳家・言語学者ジョヴァンニ・フロリオ(Giovanni Florio, 1553-1625 シェークスピアとも近かった)の 1603 年頃の言葉

「すべての学問は翻訳からおのおの子を授かった」(from translation all Science had its offspring)

(Yates, Frances A., *John Florio : The Life of an Italian in Shakespeare's England*, Cambridge University Press, 1934, p. 89)

・翻訳を通じて(散文)の書き方が固まっていたとすれば、翻訳することと書くことの間で価値の違いはあまりなかったはず(また **Writing** の各種様式間の境界はそれほど明確ではなかった)

→ 翻訳の名称が一定しなかった点に部分的に表れている

仏 *espondre, tourner, mettre en romanz, enromanchier, traduire*

伊 *volgarizzare, trasportare*

・イタリアの文化的先進 ← 百年戦争による仏英の疲弊(～1453)

・ビザンツ帝国衰退・滅亡の結果として、ギリシャ古典籍(ならびにギリシャ人)がイタリアに亡命 → 古典古代への注目

・人文主義者たちによる古典の再発見 → 文献学的手法によるテキストの復元、翻訳

キケローらの再発見(ペトラルカ、ブルーニ)

レオナルド・ブルーニ(1370-1444)によるアリストテレス、プラトン、デモステネスらの(ギリシャ語原典からの)翻訳(15c 前半)

※*studia humanitatis* といういい方を初めて用いた人

## ■ 翻訳の近代的概念の誕生……translatio から traduction へ

ラテン語 *transferre, translatio*物を運ぶ、移す、翻訳する(=文意 *sentences* を移す)*traducere, traductio*

(物理的に) 運ぶ、移す ※カエサル『ガリア戦記』

キケローの用例「命令を伝える・下達する者」の意味で *traductor*

1400 年頃 ブルーニがアウルス・ゲリウス(2c)の一節

Graecum vetus traductum in linguam Romanam 「借用する」(=「物理的に移す」の過去分詞 an old Greek word transferred into Latin)を「翻訳する」(トスカナ語の過去分詞 *tradotto*)と誤って理解・翻訳した

→ イタリア語(トスカナ語) *tradurre* が人文主義者、またロマンス語圏に広まる (イギリス、ドイツは除く)

資料 22 ブルーニ「正しき翻訳について」

Like the artist copying another picture, the translator seeks to appropriate the outline, state, movement, the entire form of the body, incorporating not what he might have done himself, but a repetition of his model's pictorial integrity, the highest form of translator thus converts with the whole understanding, mind, and will, transforming, in turn, the outline, state, movement, and colors of the style (*oratio*) so as to express all the features of the original. [English translation by Norton, Glyn P., Norton, *The Ideology and Language of Translation. In Renaissance France and their humanist antecedents*, Genève, Droz, 1984, p. 41]

En effet, pareil à ceux qui prenant pour modèle une toile en peignent une autre dont ils dérivent la structure, la position, le mouvement et la forme du corps entier sans songer à ce qu'ils pourraient faire, mais à ce que l'autre a fait, ainsi, dans les traductions, l'excellent traducteur investira toute sa pensée, tout son âme, toute sa volonté dans l'œuvre du premier auteur, se transformant de quelque manière en elle, de façon à chercher à en exprimer la structure, la position, le mouvement, les couleurs et tous les traits. Un admirable effet résulte de ces prémisses. [texte original et traduction française par Le Blanc, Charles, Leonardo Bruni, *De interpretatione recta*, Univ. of Ottawa Press, coll. « Regards sur la traduction », 2008, p. 44-47]

フランス語 *traduire* の最初の用例は 1509 年……ただし同じ文書中で *translater* と併用されている

・-duire 要素を含む語群 (< 羅 *ducere*「導く」) *conduire, induire, séduire, introduire, réduire, déduire, (re)produire, etc.*

・ラテン語 *translatio* や英語 *translation* が「移動」「伝達」(の結果)に焦点を当てるのに対し、*traduction* はその移動に働きかける主体的作用や活力、また移動に伴う「変形」作用やその「過程」に重きを置く

※現代のフランス語では *translation* はきわめて限定的にしか使用されない

→ 近代的主体とのかかわり

資料 23 セール「われわれが事物を認識するのは……」

コミュニケーションな言語としての英語

communication = translation (→ translation studies 理論)

≠ traduction

※ドイツ語 *übersetzen/übertragen*

*über-* = *trans-*

*übertragen* 「伝達する」「翻訳する」「移す」「広く行き渡らせる」「手渡す」

※フロイトの「転移」*Übertragung*

*übersetzen*

分離動詞 「渡らせる」「連れてゆく」(cf. カエサルの *traducere* の用例) / 非分離動詞「翻訳する」

→ ドイツロマン主義(またヘルダーリン)の翻訳理論

二重の「外に出る」運動の過程こそが翻訳……「他なるものの経験を通じて自己に到る」

いずれにせよ翻訳は(国別の)固有名をもつようになる

→ 翻訳家(traducteur ← traduisant)という存在の出現 (=著者の出現)

= 「母語」と「外語」(langue étrangère/foreign language)の区別

中世には「自分のとは異なる言語」(autre langue/other language)は存在したが「外国語」は存在しなかった

例えばラテン語は「外国語」ではなかった

※「翻訳家は裏切り者」(traduttore, traditore)という格言はふつうトスカナ方言のものと考えられているが、実はフランス語が最初だった可能性がある。デュ・ベレーより。

資料 24

「翻訳家以上に、裏切り者と呼ばれるに値する者がいるだろうか……」

・16世紀は翻訳ばかりか、翻訳論が多数書かれた時代

→ フランスでは1540年くらいを境として翻訳行為が価値の劣るものと見なされる傾向が生まれる

ヴィレル=コトレ布告(1539)……行政言語(公文書用言語)をフランス語と定める

エティエンヌ・ドレ(1509-46)『ひとつの言語から別の言語に巧みに翻訳する方法』(1540)……独立した翻訳論としては西ヨーロッパでは最初のもの(?)

→ 「逐語訳」(mot pour mot)を非難

資料 25

「翻訳する際は逐語訳となるまでに原文に隷属してはならない……」

ジョアシャン・デュ・ベレー『フランス語の擁護と顕揚』(1549)

・デュ・ベレーはフランス語を豊かにする為に何が重要かという観点から、翻訳の役割を限定し、代わりに模倣を推奨した

・その際、ギリシャ文化に対するローマ人のやり方を、翻訳ではなく、模倣と咀嚼(消化)と解釈する (cf. 「知の移転」)

← 翻訳は隷属的だが、模倣はそうではなく、新たな作品になる

……このような論理が可能となるには「翻訳」と「模倣」が明確に区別されている必要があるけれども、そのような区別はルネサンス以降可能となったにすぎない

※たとえば『アエネーイス』は古代ローマにおいてホメロス作品の「翻訳」と考えられていた可能性がある(Rener, Frederick M., *Interpretatio: Language and Translation from Cicero to Tytler*, Amsterdam, Rodopi, coll. « Approaches to translation studies », vol. 8, 1989, p. 309)

資料 26

## ■ジャック・アミヨ (1513-1593) ……フランス的翻訳の起源

## ・ギリシャ語原典からの翻訳

ルネサンスの「原典主義」と「母語」意識とのかかわり

オレームのような *translatio studii* の考えを突き詰めれば、「母語」や「外語」といった区別や「オリジナル」という観念は意味を失うが、ルネサンスでは逆に、従来の古典語／俗語という垂直的關係に加え、俗語間の水平的な競合関係が生ずる

→ 先進のイタリア文化と対抗すべく、イタリア語との結びつきが強いラテン語とは異なるギリシャ語への注目(翻訳に限定されない)

※ドイツの例との比較

## ・ブルタルコス(ADI-2、帝政ローマ時代のギリシャ人)『対比列伝』(仏訳 16 世紀前半～中葉)の主題と翻訳のかかわり……模倣のテーマとして

希・羅の対比 各 22 篇 eg. デモステネスとキケローなど (他に単独の伝記が 4 篇)

## 資料 27

「原著者の文意だけでなく……」

## ・語法

動詞不定形の名詞用法の定着 → 文の組立てに大きな影響があった……ただし、アミヨ風の過剰な使用は古典主義時代に制限されるようになる

不定冠詞+不定形なども多用された

定冠詞+形容詞の定着 ← ラテン語には冠詞がない

こうしたギリシャ化の過程が、ギリシャ語からの形式の移し替えであることを意識していた点でオレームと区別される

ただし、フランス語形成を主導するような翻訳の役割は 17 世紀半ば(ルイ XIV 世)に終わる

よく知られる *cogito ergo sum* は他人が

= 翻訳に依存しない文章が書かれるようになる

※ルネ・デカルト『方法叙説』(1637) …… *Je pense, donc je suis* 等を羅訳したもの

## ペロー・ダブランクール

## 資料 28

「時代が変われば……」

スウィフトの『ガリヴァー旅行記』(*Travels into Several Remote Nations of the World by English Sea-Captain Lemuel Gulliver, 1726-1735*)の翻訳者(だが仏語版続篇の作者でもある)P・デフォンテーヌは原作を大幅に改変したが、そのことをスウィフト本人に宛てた手紙で正当化している。

## 資料 29

「翻訳があまり忠実でないと……」

※もともとデフォンテーヌはその後すぐ、誤りが正されるとともに、より忠実になった改訳を刊行している。

アミヨ個人の威光は 19 世紀半ばまで続く

→ 1851 年刊行 *Auguste de Bligny, Essai sur Amyot et les traducteurs français au XVI<sup>e</sup> siècle* はアミヨの業績を讃えるものだったが、同時にアミヨの時代の終わりを告げるものだった

言語をめぐる状況の変化? ……たとえば英語とのかかわり

ただしブレイアード版『対比列伝』は現在もアミヨ訳を採用している

## 第 11 回 フランス語の形成と翻訳

## ■ 翻訳論 (翻訳について書かれたテキスト) の読み方

- ・翻訳作品それぞれの地平をつねに考える
- ・時代時代のトボス(決まった儀礼的物いい)
- ・「意味重視」か「形式重視」かというような二者択一の問いの批判
  - ※翻訳のそもそもの目的は「意味」の把握にある、すなわち「意味」を移し替えるのは翻訳の最低限の目標だから
  - ※ルター(神の教えの書き表し方は信仰のあり方によって定まる)
- ・分類はむしろ、対象テキストの種類に応じて
  - ・「意味」を移し替えれば十分なもの (産業翻訳など)
  - ・「意味」を移し替えるだけでは不十分なもの (文学、宗教、哲学など) → 翻訳論が主としてかかわる領域
    - ※法律や条約は?
- ・「英語＝ラテン語」説に対する疑問
- ・翻訳者による自身の訳業の説明……タイプ I
- ・第三者による評論・研究……タイプ II

## ■ フランスの翻訳論

フランスには重要なもの(タイプ I)が少ない(ドイツとの比較で)

- ・フランスには重要な翻訳作品が存在しない → 少数だが存在はする
- ・(実情がどうあれ)フランスでは翻訳が軽んじられてきた

← ドイツ語などと比べ、形成が早く進んでいたフランス語の国際語としての地位(中世後半期においてラテン語に次ぐ地位、17-20c 前半までのヨーロッパにおける筆頭言語)

## 資料 1

ゴットシェット(1700-1766 フランス古典主義から強い影響を受けていた啓蒙主義の中心的文学者、ドイツ語改革にも功績があった)

古代ギリシャ最良の作家たちをフランス人が自らの言語に訳したとたん、それら作家はギリシャの物腰をほとんど失ってしまう。フランスの翻訳家たちは気まぐれに従って、[...]何もかもを短くしたり、書き直したり、飛ばしたり、改良したり、改悪したりする[...]。このことは[17-18cの]ペロー・ダブランクールあるいはヴォージュラ、ダシエ夫妻らの例によって証明されるだろう。そのようなわけでこうした翻訳を読む者は、本当の意味でギリシャ[語]の書物を読んでいるのではなく、紛れもないフランス[語]の書物を読んでいるのである。

[Gottsched, Johann Christoph : « Notes à la traduction allemande de la *Digression sur les Anciens et les Modernes* de Fontenelle » (1727), traduit de l'allemand par Pierre-François Burger, *La Querelle des Anciens et des Modernes XVII<sup>e</sup>-XVIII<sup>e</sup> siècles*, Paris, Livre de Poche, 2001, p. 319-320]

## 資料 2

アウグスト・ヴィルヘルム・シュレーゲル(1767-1845)

詩において全く因襲的な語法を採用し、そこからの逸脱が許されぬような鉄則としてきた国中にはある。そうした国では詩的言語として訳すということが端的に不可能となっている。たとえばフランス語がそうだ[...]自分たちの国では外国人(Fremde)もそれぞれ当地のしきたりに則って同じように衣服を身に着け行動するよう彼らは望んでいるのであって、その結果、外国人というものを厳密に言えば全く知らぬままにしているわけである。

[ベルリンで行なった講義(1801-04) A.W. SCHLEGEL : *Vorlesungen über schöne Kunst und Literatur, Kritische Schriften und Briefe*, Hrsg. von Edgar Lohner, 7 Bde., Stuttgart, Kohlhammer, Bd. 3, « Geschichte des klassischen Literatur », 1964, S. 17 (*Geschichte*).]

## 資料 3

ヴィルヘルム・フォン・フンボルト

[...]フランス語ではギリシア人あるいはローマ人の作品、ことに幾人かの詩人の作品は、適当な手法で非常に巧みに翻訳されているというのに、それらと一緒に古代精神の最小限のものさえあの民族には浸透していない、それどころかその作品が人々にはほとんど理解されてさえない[...]

[『アガメムノン』翻訳への序論(1816)、三ツ木道夫訳『思想としての翻訳』2008、79 頁]

つまり「フランス語は翻訳に頼る必要のない言語である」という神話ゆえに、翻訳史が忘却・隠蔽されてきた

→ タイプ II の翻訳論がそれを指摘始めた(20c～、ヴァレリー・ラルポー、アンリ・メシヨニック、アントワヌ・ベルマン他)

※ドイツは逆に、フランスとの比較における遅れを意識したがゆえに、精力的に翻訳を行ないつつ、それを自尊心と矛盾しない形で正当化しようとした。先進文化を採り入れる翻訳の場合、意味内容が重視されるが、ドイツにおいては形式も重視された(ギリシャとのつながりの主張) → 翻訳についての思考の深まり(18c~、ゲーテ、シュライアマハー、フンボルト、ベンヤミン他)

資料 4

近代語の中にあつてただ一つドイツの言葉だけが、このリズムを模倣できるという長所を備えているように思える。ドイツ語の品位に対する感性とリズムに対する感覚を結びつける者は、ますますドイツ語にこの長所を授けようとつとめてやまないことだろう。[ヴィルヘルム・フォン・フンボルト『アガムムノーン』翻訳への序論(1816)、三木道夫訳『思想としての翻訳』2008、83 頁]

■ 古典ラテン語から(俗ラテン語を経て)フランス語へ

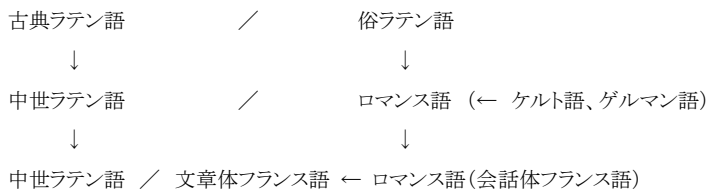
- ・書き言葉である「古典ラテン語」はキケローやウェルギリウスの時代に洗練の極みに達したのち、帝国の崩壊とともに、形を変えてゆきながらも、中世を通じ、唯一の書き言葉として、また高度な思考、抽象的な概念を唯一可能とする言語として生き延びる。また公用語として、教会の標準語として用いられる(4 世紀までカトリック典礼の言語はギリシャ語、それ以降 20 世紀までラテン語)
- ・三つの古典ラテン語……詩— 弁論— 会話体(俗ラテン語)
  - キケロー「弁論は詩のように韻律的であってもならないし、また庶民の言葉のように韻律がないという訳にもいかない。前者はあまりにも拘束的で技巧的につくられたように見え、後者はあまりにも無拘束で、[...]」(『弁論術』LVII, 195)
- ・中世ラテン語は古典ラテン語との距離は少なくなかった
  - トマス・アキナスを読んだり、ウルガータを翻訳することはできても、キケローやアリストテレスを読めるわけではない

文章体ラテン語 *sermo urbanus*

*scribere fratri meo*

俗ラテン語 *sermo rusticus / vulgaris* …… 特徴=前置詞依存傾向(分析的) 「私の兄に手紙を書く」*scribere ad meum fratrem*

- ・中世末期から次第に土地の言葉を書き言葉として用いることが試みられる



■ フランス語の形成……*translatio studii* の運動のうちに位置づけられる

- ・カトリック国であり、ロマンス語圏であることから、聖書との関係や異教古典とのかかわりにおいて、ドイツやイギリスと異なる
- ・現在のフランスの北半分における言語形成(フランク族が 5c 頃に定着した地域、パリを都とする(508 年)) ※南半分は西ゴート族の定着した地域に一致(オック語)

基層= ケルト語(ドイツ南部発祥)、ラテン語(書き言葉として行政・法律・宗教・学問に用いられる)…… Paris(ケルト系パリシー族の町)をローマ人は *Lvtecia* と名づけた

直接の祖= 俗ラテン語(*Latin vulgaire / Vulgar Latin / romana lingua rustica*) → ガロ=ロマンス諸語(*Languages gallo-romanes / Gallo-Romance languages*)のうちのオイル語 → 原フランス語 → 古フランス語(9-14c) → 中世フランス語(14-17c) → 古典期フランス語(17-18c)

496 年 クローヴィスがカトリックに改宗、ラテン語を典礼語・行政語として採用(俗ラテン語の簡略化された構文とゲルマン系語彙)

※以降フランスでは王権と教権が互いに利用し合う関係が出来る(14c の「アヴィニョン捕囚」や「境界大分裂」を経て) フランク王国では当初、俗ラテン語とゲルマン語の二言語併用 → 8c 頃より、ラテン語でもゲルマン語でもない独自の言語として自立するが、ラテン語やドイツ語とは併存していた

ラテン語由来		ゲルマン語由来	
王	roi( <i>regem</i> )	侯爵	marquis( <i>marka</i> )
公爵	duc( <i>ducem</i> )	男爵	baron( <i>baro</i> )
伯爵	conte( <i>comitem</i> )		

中世詩人はしばしば同義のラテン語系形容詞とゲルマン語系形容詞を並べて用いた

※ただし、ゲルマン語系要素はルネサンス期までに大幅に減少し、ラテン語やイタリア語由来の要素に取って代わられる

カロリング朝ルネサンス(8-9c)

・キケロー、ウェルギリウス、アウグスティヌスの再発見

・古典的ラテン語を参考に、文章体ラテン語を整備する

→ 復興された文章体ラテン語は、当時の会話体との乖離が大きく、布教に困難を避けるため、ラテン語から土地の言葉への翻訳が推奨される

資料 5

トゥール公会議 第 17 宗規(813 年、エルコック、W・D『ロマン語 新ラテン語の生成と進化』大高順雄訳、学術出版会、2009 年、344 頁)

「語られたことを誰もがもっと容易に理解しうるように、各人が説教をロマンス語ないしドイツ語に翻訳するよう明らかに努めることが満場一致で決議された」。

Ut easdem homelias quisque aperte tranferre studeat in rusticam Romanam linguam aut Theotiscam, quo facilius cuncti possint intellegere quae dicuntur [Joannes Dominicus Mansi Sacrorum Conciliorum Nova et Amplissima Collectio, vol. 14, Graz, Verlagsanstalt, Akademische Druck- u., 1960, XVII, p. 85]

842 年「ストラスブールの誓文」(Serments de Strasbourg / Straßburger Eide)……ラテン語とは異なる言語 (romana lingua ロマン語／原フランス語) として最古の文書

- ・同一内容がラテン語からそれぞれ teudisca lingua と romana lingua に訳されている
- ・行政の言葉

資料 6

「神への愛のために、またキリスト教徒とわれら全ての救いのために、今日より、神が私に知と力を与えたまうかぎり……」

ロマンス語

Pro deo amur et pro christian poblo et nostro commun saluament, dist di in auant, in quant deus sauir et podir me dunat, si saluarai eo cist meon fradre Karlo, et in adiuudha, et in cadhuna cosa, si cum om per dreit son fradra saluar dift [...].

古高ドイツ語(ライン・フランコンニア方言 Rhenish-Franconian dialect)

In godes minna ind in thes christânes folches ind unsêr bêdhero gehaltnissî, fon thesemo dage frammordes, sô fram sô mir got geuuzici indi mahd furgibit, sô haldih thesan mînan bruodher, sôso man mit rehtu sînan bruodher scal, [...].

古典ラテン語

Per Dei amorem et per christiani populi et nostram communem salutem, ab hac die, quantum Deus scire et posse mihi dat, seruabo hunc meum fratrem Carolum, et ope mea et in quacumque re, ut quilibet fratrem suum seruare iure debet, [...].

推定される当時の(法律)ラテン語

Ad Dei voluntatem et ad populi christiani et nostrum commune salvamentum, de isto die inantea, in quantum mihi Deus scire et posse donaverit, adjutor ero sic salvabo isti fratri meo istum fratrem meum (n) sicut homo per drictum esse debet fratri suo, [...].

[Alfred Ewert, « The Strasbourg Oaths », *Transactions of the Philological Society*, London, 1935, p. 22-23]

880-882 (?)「聖女ウーラーリーの続誦」(Séquence de sainte Eulalie)……原フランス語最古の文学的テキスト

- ・ラテン語で伝統的に書かれてきた聖者伝の移入
- ・ラテン語の歌から採られた内容を修道院の言葉(＝民衆の言葉に近い)に書き直したもの
- ・定冠詞と条件法動詞の出現

Buona pulcella fut eulalia. Bel auret corps bellezour anima.

Voldrent la veintre li deo inimi. Voldrent li faire diaule seruir.

11c 中 「聖アレクシ伝」(Vie de Saint Alexis)……『ロランの歌』など世俗叙事詩の原型

- ・フランスでは聖者伝と世俗文学がほぼ同時期に関連しあいながら始まる
- 王権と教権の親密な関係の表れ(中世後半から近代以降は王権が優勢となる)

文型変化 目的語・補語＋述語動詞 → 述語動詞＋目的語・補語(ただし目的語が代名詞の場合は前置)つまり動詞文末 → 文の中ほど  
 名詞・形容詞等の屈折語尾 → 前置詞の使用(ラテン語＝総合的、近代語＝分析的)……14c まで辛うじて 2 格が残る、翻訳に際してシンタクスの問題が生ずる  
 名詞修飾語句の後置／冠詞の発明／新しい音声の発明など

#### ■フランスにおける翻訳

- ・13c 頃より、支配層から注文によって古典作家 (*les auctoriates*) の翻訳が始められる
  - ※聖職者は異教古典の翻訳の必要をそれほど感じていなかった
- とりわけシャルル 5 世(在位 1364-80、イングランドとの百年戦争→国民意識の形成、教会大分裂)はルーヴル宮に図書室を造り、聖書を始めとする書物(当時は宝飾品と同じくらい貴重なもの)を集めたが、そのコレクションに加えるためもあり、古典の翻訳を命じた
  - 異教的古典の翻訳＝ローマ教会との関係の変容
- ・中世から近代初期にかけての翻訳作業について、当事者たちは一般に、それが創作より劣るものとは考えていなかった(王の命によるものであるとすれば、劣っているなどと書くことはいずれにせよ許されなかったが)

- ・ラテン語の字句通りの翻訳(少数派)

ジャン・ド・ヴィネによるウェゲティウス『軍事論』(*De re militari*, 4c) の翻訳(14c) → 上手く訳せないとすれば翻訳者の技術が低いせい

#### 資料 7

Et je, sanz nulle presumpcion, par conmant, veul mettre li dit livre en francois, selonc ce que je pourré, en ensuiant la pure verité de la lettre.

[Jean de Vignay, préface au *De re militari* de Végèce, cité dans Meyer, P., « Les anciens traducteurs français de Végèce et en particulier Jean de Vignay », *Romania*, XXV, 1896, p. 412]

- ・大多数の者はラテン語とフランス語の差ゆえに、文字通りの翻訳は不可能と考えた

アンティオキアのジャンによるキケローの修辞学 (*De inventione*, BC1c) の翻訳(13c)……シリア在住、したがって王の命によってなされた翻訳ではない

#### 資料 8

Mais il ne pot mie porsuire l'auctor en la maniere dou parler, car la maniere dou parler au latin n'est pas semblable generaument a cele dou francois, ne les proprietiez des paroles ne les raisons d'ordonner les araisonemenz et les diz dou latin ne sont pas semblables a celes dou francois.

[...] et por ce nul translateor o interpreteor ne porroit jamais bien translater d'une lengue a autre s'il ne s'enformast a la maniere et as proprietiez de cele lengue en qui il translate.

Aucune fois parole par parole, et aucune fois et plus souvent sentence por sentence et aucune fois por la grant oscurte de la sentence li convint il sozjoindre et acreistre.

[Jean d'Antioche, appendice pour la traduction du *De inventione* de Cicéron en 1282; Molk, U., *Französische Literaturästhetik des 12. un 13. Jahrhunderts*. Prologe-Exkurse-Epilogue, Tübingen, 1969, p. 105-106]

→ ラテン語とフランス語の差異を、すべての言語間の差異へと一般化する＝ラテン語をフランス語と同列に置く……革命的なこと

ジャン・ド・マンによるボエティウス『哲学の慰め』(*Consolatio philosophiae*, 6c) の翻訳(13c)……ド・マンは『薔薇物語』続篇(1270、クレマン・マロが 15c に仏語訳する)の作者、またウェゲティウス『軍事論』やアベラルー＝エロイーズの書簡のフランス語訳者として知られる。ボエティウスはアリストテレス『論理学』等をラテン語に訳している

#### 資料 9

Car se je eusse espons mot à mot le latin par le francois, li livres en fust trop occurs aus gens lais et li clers, neis moiennement letré, ne peussent pas legierement entendre le latin par le francois.



[Jean de Meun, préface pour la *Consolatio philosophiae* de Boèce, Dedeck-Hery, V.-L., Boethius. *De consolatio* by Jean de Meun, *Mediaeval Studies*, XIV, 1952, p. 168]

「逐語訳は、世俗の人々 (laics) には理解不能だし、(中世ラテン語に通じている) 聖職者 (clercs) には必要がない」

■ *translatio studii* の問題……知と特定言語の結びつきは絶対的なものか

クレティアン・ド・トロワ (12c フランスの吟遊詩人)……アーサー王伝説 (まずラテン語でまとめられた) をフランス語で歌い (『クリージェス』ほか)、その普及に大きくかかわった

資料 10

Ce nos ont nostre livre apris

Qu'an Grece ot de chevalerie

騎士道と学問の名声を最初に手に入れたのはギリシャだった

Le premier los et de clergie.

Puis vint chvalerie a Rome

次いでローマを騎士道、そしてそれと共に学問が通り過ぎ

Et de la clergie la some,

Qui or est an France venue.

それらは今やフランスにやって来た

Dex doint qu'ele i soit maintenue

Et que li leus li abelisse

Tant que ja mes de France n'isse

フランスにたどり着いた栄光が二度と立ち去ることのないように……

L'enors qui s'i est arestee.

Dex l'avoit as altres preste :

Car des Grezois ne des Romains

Ne dit an mes ne plus ne mains,

D'ax est la parole remese

Et estainte la vive brese.

[Chrétien de Troyes, prologue du *Cliges*, v. 28-42, ]

文化をわがものとする (*appropriation culturelle*) という主題……ただし、王を讃えるといった目的にも奉仕するトポス

■ ニコル・オレーム (Nicole Oresme 1320?-1382)

フランスの聖職者、哲学者・科学者

シャルル 5 世の命によりアリストテレス『ニコマコス倫理学』(=ロマンス語における初の完訳、1370)、『政治学』ほか古典の翻訳を行なう……13c の中世ラテン語訳 (*Vetus translatio*) からの重訳

※アリストテレスの著作はギリシャ語からアラビア語に訳され、イスラム文化圏で独自に継承・展開が行なわれていた

オレーム訳『ニコマコス倫理学』には「序文」(Proheme) と「弁明」(Excusacion et commendacion de ceste œuvre) が添えられた。前者では『倫理学』(とその翻訳)の意義・効用について、後者ではギリシャ語、ラテン語、フランス語ならびに翻訳についての考察が述べられている

→ オレームは、ギリシャ語→ラテン語の歴史的関係、ギリシャ語より遅れた言語であるラテン語が「知の移転」を通じて改良(洗練)された事例を、ラテン語→フランス語の関係に投影した

資料 11

ルクレーティウス『物の本質について』(紀元前 1c, Lucretius, *De rerum natura*, I, 136-139「第一巻」樋口勝彦訳、岩波文庫、1961、16 頁)

「ギリシア人のわかりにくい発見を、ラテン語の詩に綴って説明するのは、至難な業であることは、私とても心に気づかないわけではない。ことに[ラテン語の]言葉の貧困さと、説く内容の新しさとのために、新しい単語を用いて多くの事がらを論じなければならない」

*Nec me animi fallit Graiorum obscura reperta difficile inlustrare Latinis versibus esse, multa novis verbis praesertim cum sit agendum propter egestatem linguae et rerum novitatem;*

エピクロス哲学(現存しない『自然について』)をラテン語に移し替えたものであり、少くとも題名は翻訳である。

※ただし、ラテン語はギリシャ語と同様の「簡潔さ」(ないし総合性)をもっているため、分析的な近代語への *translatio studii* におよぶように語(前置詞その他)や説明を付け加える必要はあまりなかった

## 資料 12

[...] est il ainsi que pour le temps de lors, grec estoit en resgart de latin quant as Romains si comme est maintenant latin en regart de françois quant a nous. Et estoient pour le temps les estudians introduiz en grec et a Romme et ailleurs, et les sciences communelment bailliees en grec ; et en ce pays le langage commun et maternel, c'estoit latin.

[Oresme, *Excusation au Livre de Éthiques d'Aristote*, édition de Menut, p. 110]

「ローマにギリシャ語で学問が移入されたとき、その地における日常語、母語はラテン語だった」

※オレーームは「母語」という表現をラテン語から俗語に最初に訳した

ただし、古代ローマ市民にとって生得の言葉は「母語」というよりむしろ「父語」(*patrius sermo*)だった＝生得の言語は当時は父的なものと結びつけられていた

おおよそ同じ時代、イングランドの詩人チョーサーもまた、土地の言葉で学問を行なうことに価値を与えていた。

※当時、イングランドではフランス語は支配者の言語だった

## 資料 13

But notheless suffise to these trewe conclusions in Englishh as wel as sufficith to the noble clerkes Grekes these same conclusions in Grek; and to Arabiens in Arabik, and to Jewes in Ebrew, and to the Latyn folk in Latyn; whiche Latyn folk had hem first out of othere dyverse languages, and writen hem in her owne tonge, that is to seyn, in Latyn.

[Geoffrey Chaucer, *A Treatise on the Astrolabe* (1391), *The Complete Works of Geoffrey Chaucer*, Oxford, 1933, p. 545-546]

翻訳の営みはオレーームにおいて初めて、特定の作品を離れて、知や文化の移転(*appropriation* わがものとする)を一般的に問うものとなる

→ 知とラテン語の結びつきは絶対的なものか

・絶対的であれば「移転」は不可能。なぜなら「移転」は「知」の変容を伴うため、元の状態のままの「移転」ではなくなってしまうから

→ オレーームはラテン語 *communicatio* から *communication* を造ったが(1370)、元の意味のうち、キリスト教の影響下にあった *communio*「社会的関係、人間相互の関係」という意味が失われ、*communication* = *translation*「内容の移転」を意味するようになる

→ つまり、事実としては、翻訳において「知」の「内容」は変容を蒙るのだが、オレーームはその点は無視して、普遍＝不変の「内容」の移転は可能であると主張

・こうした *translation* において、移転される「内容」(情報)だけが重要なのだとすれば、そのとき、その「内容」と特定の言語(＝ラテン語)との結びつきは絶対的なものではなくなる……これがフランス王と翻訳者オレーームの目指すところだった、つまりアリストテレスの思想内容はフランス語にも訳しうるはずだという信念

※意味内容と特定言語の紐帯が否定されれば、翻訳過程で何も失われず、したがって翻訳も——また翻訳の翻訳も——原典と同等の価値を有するようになる(当時フランスにおいてさえ、翻訳は一段劣ったものとは見なされていなかった)

## ●前回までのまとめ

## translatio studii

- ・王の命により、ラテン語で書き表されてきた学問・学知を俗語に移し替える
  - 言語から離れて存立しうる知というものを前提としている
- ・実際に起こったことは、知を移し替える際に言葉が変容してしまうということだった(例:communication)
  - すでに出来上がった容器(としての言語)に内容としての知を注ぎ入れるということではなく、移転と並行して容器そのものを作る必要があった
    - ※現代のたとえば日本語、中国語、英語等々のように、とりあえず容器が出来上がっている(かに見える)言語間ではどうか?

オレームは単に王の命に従っただけではなく、その命に理論的な根拠(=「知の移転」)を与え称賛した。

## 資料 14

[...] pour ce que les livres morales d'Aristote furent faiz en grec, et nous les avons en latin moult fort à entendre, le Roy a voulu, [...], faire les translater en françois, afin que il et ses conseillers et autres les puissent mieulx entendre [...].

[Nicole Oresme, *Proheme au Livre de Éthiques d'Aristote*, édition de Menut, New York, G. E. Stechert & Co. Publishers, 1940, p. 99]

Donques puis je bien encore coclurre que la consideracion et le propos de nostre bon roy Charles est a recommander, qui fait les bons livres excellens translater en François.

[Oresme, *Excusation au Livre de Éthiques d'Aristote*, édition de Menut, p. 110]

- ・ただし、名目上はラテン語と同等になったとしても、フランス語には語彙も哲学的論述に必要な各種形式もそなわっていなかった
- オレームの訳業は、(現代の視点からすると)翻訳と註釈の中間にあるといえるが、これは散文をつくり出すという要請にかかわっていた

※哲学の翻訳と註釈の問題

## 資料 15

[ラテン語訳]                      [トマス・アキナスによる註釈]                      [オレーム訳]

et multi            et multi, id est populares    la multitude, c'est-à-savoir les populaires

In omnibus itoque architectonicarum fines sunt desiderabiliores his quae sunt subhis. (Vertus translatio)

Ainsi les fins de toutes les sciences architectoniques sont plus importantes que celles des sciences subordonnées. (trad. moderne par Voilquin)

Et en toutes telles choses les fins des arts ou doctrines qui ont principalite sur les autres sont meilleurs et plus desirables a tous que les fins de celles qui sont dessouz elles. (trad. Oresme)

omnis ars et omnis doctrine [...] bonum quoddam appetere videtur

tout art et toute recherche [...] tendent, semble-t-il, vers quelque bien (trad. moderne de Voilquin)

Tout art et toute doctrine [...] appetent et desirent aucun bien (trad. Oresme)

→ 結果としては、「内容」の移転のほすが、「形式」(特に語彙と論証形式)の移転ともなった=フランス語の一種のラテン語化……つまり、オレームは「内容」の移転として *translatio studii* を考えていたのだが、実際に彼が行なおうとしたことは、その構想を越えるもの(=traduction)だった

一般に古典からの翻訳における語彙の問題は

- ・ラテン語がフランス人にとって全く未知の事柄を表している場合
- ・意味の近似したフランス語が、学問的ではない日常言葉でしかない場合
- 中世の翻訳者はいずれの場合も、ラテン語を敷き写して新語を造るやり方を好んだ
  - オレームもラテン語訳が転写したものを引き継ぐ形でフランス語に採り入れた
  - ※新語(新たな現実に対応する語)の必要性和正統的ラテン語保持の両立不可能性

## 資料 16

abstraction, abus, action, application, communication, conjonction, coordination, détermination, dialogue, dualité, fonction, hiérarchie, identité,

imitation, impossibilité, impression, intelligence, motif, objet, observation, passion, perspective, principe, probabilité, relation, rythme, sujet, symbole, technique, transformation, etc.

新語・造語は、それ自体の意義を説明する別の語句を必要とする

→ 文中における類義語の並置 → ある種の文体として定着

フランス語哲学的——論証を可能にするような——散文の誕生

→ 論旨を追うことが困難な文章に混じって、きわめて「現代的」な文章がオレームの翻訳中に史上初めて誕生した

#### 資料 17

[...] car se il faisoit ainsi, il ne ouvreroit pas selon la vertu de liberalité ; Les autres bestes communiquent ensemble en mengier et en habitation ; mais communiquer en paroles est propre a nature humaine ; La maniere de traicter ceste science et de y procéder doit suffire se les choses y sont declarees selon ce que requiert la matière subjecte. [*Ibid.*, p. 70]

Item, se en telz parles a aucunes choses qui ne lui soient bonnes mais soient contre le honeste de lui ou lui soient nuisibles et contre son profit, il avra indignacion de faire par ce delectacion a ceulz qui les dient et eslira plus a contrister les. [*Ibid.*, p. 69]

ロジャー・ベーコン(13c イギリスの司祭、哲学者、科学者)……オクスフォードのほか、パリでも活動を行なう、ヘブライ語・ギリシャ語・ラテン語の文法書を著した

#### 資料 18

Et hoc potest quilibet probare, si scientiam quam novit velit in linguam maternam convertere. Certe logicus non poterit exprimere suam logicam si monstrasset per vocabula linguae maternae ; se oporteret ipsum nova fingere, et ideo non intelligeretur nisi a seipso.

[Roger Bacon, *Opus tertium*, XXV, edition by J. S. Brewer, Rolls Series, XV, 1859, p. 90]

「論理学者は自身の母語で論理を言い表すことができず、新しい言葉を造りださなくてはならないだろう。その結果、自分以外に誰も彼の考えを理解しなくなる」

ピエール・ベルシュイール(14c フランスの司祭、哲学者)……自らラテン語で哲学書を著す、また BC1c ローマの歴史家ティトゥス・イウィウスの『ローマ建国史』を訳す(14c 中頃)

#### 資料 19

[...] combien que la tres haute maniere du parler et la profonde latinité que a ledit aucteur soit excédent mon sens et mon enging, comme les constructions d'iceli soient si trenchiees et si brieves, si suspensives et si d'estranges moz que au temps de maintenant pou de gent sont qui le sachent entendre, ne par plus fort raison ramener en François. [...] au commencement du livre, apres le prologue, je feray un chapitre ou tout par ordre de l'A.B.C. je declareray les significas des mos dessus dis afin que, [...].

[Pierre Bersuire, préface aux *Decades* de Tite-Live, Monfrin, J., « La traduction française de Tite-Live », *Histoire littéraire de la France*, XXXIX, 1962, p. 360-361]

フランスで初めて用語説明(glossary)を翻訳に添える……70項目

→ ベルシュイールの意図はどうあれ、訳語の定着・安定化に寄与するものだった(40ほどの写本の数が物語っている)

→ 難しい術語を含む翻訳のあるべき形とは？

※同時代の試みとしては他に、挿絵による意味の説明もあった(エンブレムの伝統)

■ルネサンス(キリスト教神学にとらわれぬ自由な思考のために古代が模範として注目される)

中世においては、散発的に古典は見出されていたが(イギリスなど周辺諸国や「トレド翻訳学派」から)、本格的な再発見は、東ローマの滅亡(1453)に伴って、コンスタンティノポリスなどからギリシャ語話者や文献がイタリアに移ってきてから(同時代までにビザンツ帝国で培われてきた古典文献学を採り入れた)

ルネサンス(古典復興)とは、言語的、翻訳的には、

忘れられていた古典古代文化・言語を再発見し、

それを範として中世ラテン語を改良すること、そして同時に、

古典ギリシャ語・ラテン語を模範として各俗語を共通語として、また標準的書き言葉として洗練させること

(のち 17-18 世紀にフランス語の「普遍」化と並行して各国語の洗練・製錬が起こったのと相同的)

翻訳、文法整備、文献学の萌芽

各俗語の最初の文法書＝仏 15 世紀、伊 15 世紀中葉、独 1530 年代、英 16 世紀末(グラマティカとは「法則」、「書かれたもの」)

「方言」への関心が高まる(ギリシャの再発見との関連? 言葉としてはギリシャ語起源「アッティカ方言」)

原典への忠実性という問いがそのものとして現われたといえるが、それは聖書翻訳における忠実性の問いと同じものか?

ラテン語に代えて俗語を用いようという機運は、ひとつにはローマ教会から自立した国民国家の建設(国民国家という幻想を支えるのが共通語や共通語で書かれた書物→聖書)